ツルマンリョウの新産地(広島県)とその生態

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-12-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中西, 弘樹, 吉野, 由紀夫, Nakanishi, Hiroki, Yoshino, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00056236

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

中西弘樹*・吉野由紀夫**：ツルマンリョウの新産地（広島県）とその生態

Hiroki NAKANISHI & Yukio YOSHINO: New Locality and Ecology of *Anamtia stolonifera* KOIDZ. in Hiroshima Prefecture.

はじめに

ツルマンリョウ，一名ツルアカミノキ（*Anamtia stolonifera* KOIDZUMI）はヤブコウジ科の常緑匍匐性低木で，これまで日本ではその産地として屋久島，山口県，奈良県が知られていた。そのうち山口県では2ケ所，奈良県では8ケ所の自生地が確認されており（岡 1952；小清水・菅沼 1951a, b, 菅沼 1975a），そのほとんどが国あるいは県の天然記念物に指定されている。最近沖縄本島からも発見された（小林 1984）。本種は稀産植物として，また隔離分布をする著しい例として有名である。

筆者の1人吉野は，1983年広島県豊田郡本郷町周辺の植生およびフロラを調査している際，見なれぬ植物を採集し，中西と共に検討の結果ツルマンリョウであることを確認した。その後筆者らは1984年2月上旬自生地を訪れ，その生態を調査したので，ここに新産地として報告すると共に，その生育地の立地および群落組成について記載しておきたい。

本稿をまとめるにあたってツルマンリョウに関する文献を御恵与下さった奈良女子大学菅沼孝之教授にお礼を申し上げる。

新産地と生育立地

今回発見された新産地は広島県豊田郡本郷町免開で，北緯約34°25′に位置する（Fig. 1）。これは山口県の自生地よりやや北で，奈良県の自生地（北緯約34°20′〜30′）とほぼ同じ緯度に位置する。これまで報告のあった生育地の海抜は，山口県では約60 m, 220 m（岡 1979），奈良県では200〜380 m（小清水・菅沼 1953a）で，広島県の生育地は約240 mであった。沖縄の約490 m（小林 1984），屋久島の600〜1200 m（MASAMUNE 1934）を除くといずれも同じ範囲に入り，低山帯下部にあたる。

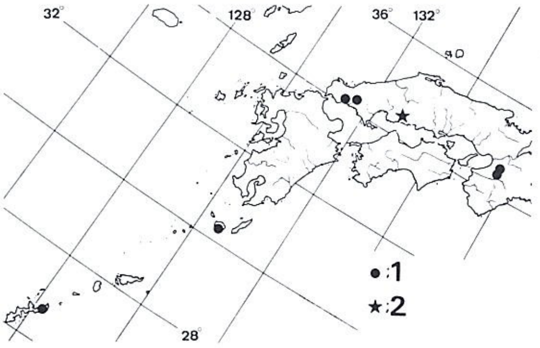

Fig. 1. Distribution of *Anamtia stolonifera*. 1: previously known localities, 2: new locality.

生育地は谷をのぞむ北西に面した斜面中部で，傾斜は約40°とかなり急で，花崗岩の露岩が見られる。奈良県と山口県の生育地も多くが急斜面で（小清水・菅沼 1951a；岡 1979），その点では一致する。

生育している範囲は約50 m²の広さで，個体数ははっきりしないが，立と上がった茎の数は100本以上あり，ほぼ群生している（Fig. 2）。茎は下部が匍匐し，上部は立ち上がり高さ50〜100 cmとなるが，崖のへりに生育しているものは半ば下垂している。調査を行った2月上旬，一部の枝にはまだ凋萎した花弁が残っている雌花が見られたが，これは小清水・菅沼（1951a）の観察と一致する。果実はすでに鳥に食べられてしまったらしく全く見られなかった。

ツルマンリョウが日本で最初に発見されたのは，1923年奈良県吉野町妹山からで，同じ年に屋久島で

Fig. 2 *Anamtia stolonifera* growing a steep slope in Hongo-cho, Hiroshima Prefecture (Feb. 8. 1984).

＊長崎市大手町 477-53. Ohte-machi, 477-53. Nagasaki City
＊＊広島市中区東千田町 広島大学理学部植物学教室Botanical Institute, Faculty of Science, Hiroshima University, Higashisenda-machi, Naka-ku, Hiroshima City

も採集された。その後奈良県下で次々に自生地が見つけられた（小清水・菅沼 1951a, b, 1953b）が，山口県で発見されたのは約 30 年後のことであり（岡 1952），最近報告された沖縄本島（小林 1984）と，今回の広島県からの発見はさらにその約 30 年後になる。本種の分布の解明にはきわめて長い年月が経過していることになり，台湾から奈良県までの分布域の空白部分が少しずつ埋められてきた。今後，九州，四国からの発見が期待される。

群落の種組成

ツルマンリョウの生育する群落については，奈良県から小清水・菅沼（1951a, 1953a），山口県から岡（1979），菅沼（1975b）の報告があり，シイ自然林かあるいはそれに近い林分であり，多くが社叢林として保護されてきたものであることが明らかにされている。広島県本郷町の群落は Table 1 に示したようにアカマツ疎林中にヒノキがまばらに植林された林分であり，亜高木層と低木層にはアラカシ，ウラジロガシ，リンボク，サカキ，ヤブツバキ，カナメモチ，シロバナウンゼンツツジなどの常緑広葉樹と共に，リョウブ，コバノミツバツツジの落葉樹を混生している。この林分はこれまで報告された群落と異なって，明らかに人為の影響を受けた二次林である。しかし種組成が提示された山口県および奈良県妹山の群落（岡 1979，小清水・菅沼 1951a）と草本層を比較すると，キジノオシダがこの群落に特徴的に出現し，ヤブコウジ，シシガシラ，ウラジロなども共通に出現している。ツルマンリョウの生育地周辺の谷は，広島県では珍しいかあるいは少ないカギラズラ，キジョラン，キダチニンドウ，アオキが生育し，かなり温暖であると共に湿潤なことを示している。

小清水・菅沼（1953a），菅沼（1975a）は，ツルマンリョウの生育には光条件が重要であることを指摘している。したがって広島県本郷町の群落は，人為的な影響を受け二次林となったものの，その作用が漸次的で林床が急に明るくなるようなことはなかったこと，また立地が急斜面で露岩があるため比較的林床が荒されなかったことが，自然林でないのにもかかわらずツルマリョウの生育を支えてきた理由となっていると考えられる。

文　献

小林元男．1984．ツルマンリョウ―琉球の新産地．レポート日本の植物，20：184．

小清水卓二・菅沼孝之．1951a．ツルマンリョウの生態研究（予報）．生態学会会報，1：45-46．

小清水卓二・菅沼孝之．1951b．ツルマンリョウ自生地の追補報告．関西自然科学研究会誌，5：10-12．

小清水卓二・菅沼孝之．1953a．ツルマンリョウ自生地の群落学的観察．奈良県綜合文化調査報告書，吉野川流域龍門地区．pp. 112-116．奈良県教育委員会，奈良．

小清水卓二・菅沼孝之．1953b．奈良県中龍門村三茶屋のツルマンリョウ自生地．関西自然科学研究会誌，7：34．

MASAMUNE, G. 1934. Floristic and geobotanical studies on the Island of Yakushima, Province Osumi. Men. Facul. Sci. Agr. Taihoku Imp. Univ., 11: 1-637.

岡　国夫．1952．山口県のツルアカミノキ．植物研究雑誌，27：164．

岡　国夫．1979．ツルマンリョウの分布と山口県に

Table 1.　Species composition of the forest where *Anamtia stolonifera* grows.

Locality 調査地：Menkai, Hongo-cho, Toyoda-gun, Hiroshima Pref. 広島県豊田郡本郷町免開
Altitude 海抜：ca 240 m, Slope aspect 方位：N45°W, Slope degree 傾斜：45°, Sample-plot size 調査面積：100 m²

Tree layer (Height: 12m, Coverage: 50%)			Chamaecyparis obtusa	(Hinoki)	+
Chamaecyparis obtusa	(Hinoki)	2.2	Ligustrum japonicum	(Nezumimochi)	+
Cinnamomum camphora	(Kusunoki)	1.1	Osmanthus heterophyllus	(Hiiragi)	+
Pinus densiflora	(Akamatsu)	1.1	Photinia glabra	(Kanamemochi)	+
Subtree layer (Height: 6m, Coverage: 50%)			Cleyera japonica	(Sakaki)	+
Quercus salicina	(Urajirogashi)	2.2	Herb layer (Height: 0.6m, Coverage: 40%)		
Quercus glauca	(Arakashi)	1.1	Anamtia stolonifera	(Tsurumanryo)	2.2
Cleyera japonica	(Sakaki)	1.1	Struthiopteris niponica	(Shishigashira)	+.2
Clethra barbinervis	(Ryobu)	1.1	Gleichenia japonica	(Urajiro)	+
Prunus spinulosa	(Rinboku)	1.1	Plagiogyria japonica	(Kijinooshida)	+
Shrub layer (Height: 1.5m, Coverage: 50%)			Ardisia japonica	(Yabukoji)	+
Rhododendron serpyllifolium			Rhododendron serpyllifolium		
f. albiflorum	(Shirobanaunzentsutsuji)	3.3	f. albiflorum	(Shirobanaunzentsutsuji)	+
Quercus glauca	(Arakashi)	1.1	Quercus glauca	(Arakashi)	+
Camellia japonica	(Yabutsubaki)	1.1	Trachelospermum asiaticum		
Rhododendron reticulatum			var. intermedium	(Teikakazura)	+
	(Kobanomitsubatsutsuji)	1.1	Eurya japonica	(Hisakaki)	+
Eurya japonica	(Hisakaki)	1.1	Camellia japonica	(Yabutsubaki)	+
Castanopsis cuspidata var.			Castanopsis cuspidata var.		
sieboldii	(Sudajii)	+.2	sieboldii	(Sudajii)	+
Illicium religiosum	(Sikimi)	+.2	Chamaecyparis obtusa	(Hinoki)	+

注：ツルマンリョウは低木層にもあるが，草本層にまとめてある。

おける育地について．宇部短期大学環境科学研究報告，1：57-71.
菅沼孝之．1975a. ツルマンリョウを追って(上)．自然と盆栽，62：65-70.
菅沼孝之．1975b. ツルマンリョウを追って(下)．自然と盆栽，63：73-77.

Summary

Anamtia stolonifera KOIDZ. which is an ever-green prostrated shrub has been known in Taiwan, and also Okinawa-, Kagoshima- (Yakushima Is.), Yamaguchi- and Nara Prefectures of Japan. It was recentry found on a steep, northwest facing slope in Hongo-cho, Hiroshima Prefecture. The community where this species was growing was phytosociologically investigated.

(Received Mar. 7, 1984)

土屋　守：コガネギシギシの新産地

Mamoru TSUCHIYA : *Rumex maritimus* L. Newly Found in Saitama Prefecture.

コガネギシギシはヨーロッパからオホーツク海沿岸にかけて広く分布し，日本では北海道北部と青森県に知られている。本種は大井先生の日本植物誌によれば海岸，砂地に生ずとあるが，Flora Europaeaeでは湿地にも産するという。1983年7月3日，本種を埼玉県越谷市三野宮の水田地帯に見いだした。

田畦に一株だけ生えており，上部は刈り払われていた。1984年に再び同所へ行ってみたが，ついに見当らなかった。ところが，1984年6月に同市内東部を流れる古利根川の河岸にて黄褐色の果実をつけた20株ほどの本種を見いだした。ギシギシやナガバギシギシなどと混生しており，果期でなければ見落としてしまう。

この場所の約5 km上流にはキタミソウの大群生地があり，キタミソウ同様本種も水鳥によって種子が運ばれ定着したものと推察される。

(Received Nov. 9, 1984)